

一 お客さまの健康と信頼の拡大

認知症サポーター養成講座を実施

お客さまだけでなく地域の見守り役として共助社会の担い手になるため、振り込め詐欺や地域包括支援センターの情報、孤立高齢者への接し方・対応方法なども盛り込んだ認知症サポーター養成講座を全サービスセンターで実施予定です。

2023 年度実施

13/33 サービスセンター



前橋東SC



藤岡SC



笠懸SC



高崎南SC

認知症サポーターの証

認知症サポーターには「認知症の人を応援します」という意思を示す認知症サポーターカードやオレンジリング等が渡されます。

令和2年度までは認知症サポーターの証として、オレンジリングが全国一律で配布されていました。令和3年4月以降は、原則として、講座の実施主体である市町村・都道府県及び企業・職域団体ごとに作成される認知症サポーターカードが渡されます。また従来通り、オレンジリングを配布する市町村・都道府県及び企業・職域団体もあります。



講師紹介（前橋地区）

はじめまして、NPO法人三和会の湯浅真澄です。普段は旧日赤跡地にオープンしたPARK SIDE CAFÉ Praline × iba-shoにあります認知症伴走型支援事業所で認知症や介護について市民の方々の相談業務を行っています。

今後、日本はますます高齢者が増え、認知症の方も増える予測されます。自分の家族や周りが認知症になっても、これまで通りの生活ができるようサポートできる環境や人が増えることがとても大切になります。認知症サポーターは地域でそして身の回りの人の心の支え手となる役割があります。認知症の人は理解者がいるだけで安心して生活を送ることができます。私はそういった理解者を増やす活動をこれからもしていきたいと思っています。



NPO法人三和会
認知症サポーター講師
湯浅真澄 様

一 お客さまの健康と信頼の拡大 お役立ち報告

各サービスセンターからの「お役立ち報告書」の特集です。特別なことではなく「当たり前のことをしただけ」という意識ですが、それはお客さまとの信頼関係に基づく「つながり」なくしては有り得ない事例ばかりです。さらにヤクルトをお届けする仕事が社会に不可欠な「エッセンシャルワーク」であることの証明のようにも思われます。

1 人暮らし高齢者の孤独死に遭遇

藤岡SC 蜂谷香織

1人暮らしのおじいちゃん宅でのこと。お届けに何うと、前回の分がそのままになっていました。さらに数日分の新聞も溜まっています。車はあるのでチャイムを鳴らしたものの、人が出てくる気配がありません。マネージャーに相談し、前回分のヤクルトを回収してから、午後もう一度伺うことにしました。

再訪したのですが、変化がありません。さすがに何か変だと、お隣の方や近くのお店の方に「何かご存じですか?」と聞き回りましたが、皆さん分からず、かえって「心配してたんですよ…」とのこと。「裏口が開いているかも」ということで、一緒に行ってみると幸い入ることができました。中を確認していただくと、そこにはすでに亡くなられているお客さまが…。

一段落したあとのこと。ご家族から「発見してくれて、本当にありがとうございました」と、丁寧なお礼をいただきました。

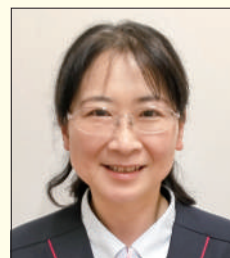


いつも地域を見守っている!

笠懸SC 高橋典子

お届け中、自分のエリアを周っているとポストに新聞紙が溜まっているお宅を目にした高橋さん。愛飲のお客さま宅ではないのですが、どうしても気になって近所のお客さまに連絡をしたところ、たまたまそのお宅が身内だったため、すぐに警察に連絡しました。高橋さんも警察が来るまでお客さまに寄り添い、警察からの連絡を待ちました。調査の結果、その方は家の中ですでに亡くなっていたそうです。

落ち着いた頃、お客さまより本店に「高橋ADにお世話になった。改めて感謝を伝えて欲しい」と、お礼の電話をいただきました。



見て見ぬふりができず…

太田SC 山口知朱

お届けエリアを走っていると、お客さまではないお宅の水道から、ものすごい勢いで道路に向けて水が噴き出ているのを発見しました。通り掛けの人は、みんな見て見ぬふりでしたが、山口さんは車を停めてそのお宅をピンポンしました。あいにく留守のようだったので、自身の判断で外水道の栓を止め、経緯を書いた手紙を置いてその場を去りました。

その後、その方からお礼の電話が本店に入り、後日山口さんにも直接お礼がありました。なかなか出来そうで出来ないことです。



いつもと違う、何かに気付く

富岡SC 水上八千代

お届けに伺うと、何かいつもと様子が違う感じがしました。幸い玄関が開いていたのでお声掛けをしながら家の中の様子を伺いましたが、お客さまからの返事はありません。いよいよ変だと目を凝らしてみると、なんとお客さまが廊下で倒れているではありませんか。

すぐに駆け付け、うつ伏せのまま「うーん」としか声が出ないお客さまの名前を呼び続け、冷くなった手を握って温めました。さらに近くに住むお客さま宅に駆け込み、救急車の手配等をすませ、救急隊の方が来るまで介抱を続けました。

退院後の現在は、懸命にリハビリを続けていらっしゃるそうです。



ふたりで協力しながらの手当と介抱

吉井SC 反町菜美・樋田香里

お届けに向かう途中、反町さんは道路に倒れこんでいる方を発見し、慌てて車を停めて駆けつけました。どうやら転んで頭を打ってしまったようですが、頭部からの出血を見て、躊躇せず救急車を要請しました。その後、通りかかった樋田さんも合流し、救急車が到着するまでの間、二人で手当と介抱を続けました。

週明けに吉井地区の「長寿会」からスタッフさんにぜひ感謝状を進呈したいとの連絡があり、その後、吉井センターで長寿会の代表の方から感謝状を授与していただきました。



的確な行動でお客さまの命を救う

松井田SC 鈴木ひとみ

いつも代金をポストに用意しておいてくださるお客さまなのですが、その日は入っていませんでした。この20年間で初めてのことでした。さらに、新聞も溜まったままです。

ただ事ではないと思い、お客さまの名前を大声で呼んでみると返事はあるのですが、一向に出てくる気配がありません。もしやと思い、郵便受けから家の中を覗いてみると、吐瀉物の中に倒れこんでいるお客さまが目に入りました。動くことが出来ない様子で鍵もかかっていることから、お客さまを説得して救急車を手配しました。そして救急隊員の指示に従い、吐瀉物で気道が塞がらないよう声をかけ続けました。

後日、安中警察署の方から「もう少し遅かったら危なかった」とお礼を伝えられました。



素早い判断と対応でお客さまの命を救う

澁川北SC 原純子

いつもの時間に訪問したところ、普段対応してくださる奥さまがお昼寝中ということで、ご主人には「後で伺いますね」と伝えて次のお届け先に向かいました。

再度伺った際に、玄関に入るとご主人が座り込んでいて、声をかけると「右側に力が入らない…」とのこと。とっさに脳梗塞を疑い、庭に出ていた奥さまに「血圧計はありますか？」と声をかけ、測ってみると上は180、下も140と高い。一刻を争うと感じた原さんは、奥さまの承諾を得て救急車の手配をしました。

後日、ご主人の実妹さんから「時間をずらして再度訪問してくれなかったら、兄はダメだったかもしれない。原さんのおかげで命が助かりました」と、お礼の言葉をいただきました。

